

令和5事業年度 北方領土問題対策協会評議員会 議事要旨

1. 日 時

令和6年3月21日(木) 15:00～16:30

2. 場 所

秋葉原UDXカンファレンス6階「Room D」

3. 出席者

<評議員>

河内評議員、菅原評議員、飯野評議員、石垣評議員

<評議員：オンライン出席>

石川評議員、松本評議員、野潟評議員、鈴木評議員、濱松評議員

<北対協役職員>

山本理事長、鶴田専務理事、中野監事、東田監事、石川事務局長、  
竹内事務所長、佐藤総務課長、坂上上席専門官

4. 議題

(1) 議長の選任について

(2) 北方領土問題対策協会業務説明について

① 令和5年度 業務報告について

一般業務関係 説明：坂上上席専門官

貸付関係 説明：竹内事務所長

② 令和6年度 年度計画(案)について

説明：佐藤総務課長

③ 令和6年度 事業計画(案)について

一般業務関係 説明：坂上上席専門官

佐藤総務課長

貸付関係 説明：竹内事務所長

(3) その他

## 5. 会議概要

(1) 山本理事長冒頭挨拶

(2) 議長の選任

満場一致で河内評議員が議長に選任

(3) 議題についての説明

(4) 質疑概要

以下のとおり。

### 【野潟評議員】

住宅の関係について、融資を受けられるのは、直す・建てる場合だけなのか。例えば、家屋を取り壊す際に、資金の活用はできるのか。

### 【竹内事務所長】

取り壊しの規模にもよると思うが、住宅資金としては、直すか、建てるかという形になっている。住宅建設時に取り壊しが入る場合は、それも含むことはできるかと思うが、単純に壊すだけとなると、今の規程上は難しい。

### 【野潟評議員】

今年度の洋上慰霊の際の食堂の音響関係やテレビ等について、何か気が付くところはなかったか。音響の聞こえや、テレビの画質が悪い印象を受けたが、協会として、どのように認識しているか。

### 【坂上上席専門官】

音響については、一部聞き取りにくいとの声があったため、マイクに近づいて話すように事務局内で注意喚起を行い、すぐに改善を図った。テレビ画面については、洋上慰霊実施後、「えとぴりか」一般公開の際にビデオ上映会を行ったが、特に不都合はなかったため、承知していない。来年度、事業を行う際には留意して進めていきたい。

### 【野潟評議員】

洋上慰霊について、今年度は太平洋側に出てもらった。その際、根室半島は

霧がかかっていたが、太平洋側の洋上からは、勇留島、秋勇留島、志発島、多楽島をきれいに見ることができた。コースや日程の設定について、協会としてどのように考えているか。

**【坂上上席専門官】**

洋上慰霊については、千島連盟事務局から様々伺っている。船の会社からは、その時の気象条件、海象条件によって進める範囲が決まると言われているところ。もし、来年度も洋上慰霊を実施することになった場合には、必要となる前提条件を加味し、千島連盟事務局と連携を図り、元島民の方に寄り添った形で、コース取り等を検討したい。

**【野潟評議員】**

融資の貸付制度対象者（資格承継）の条件について、同居の場合は元島民の年収が 383 万円以下、別居の場合は月 5 万円の仕送りが必要というものがあるが、これについて見直すことは考えているか。

**【竹内事務所長】**

対象者の条件が厳しいとの声が多いことは承知している。われわれ協会は、決められた法律に基づいて施行する立場であることから、今どうしたいかということは申し上げるのが難しい。

**【野潟評議員】**

法律は旧漁業権者法に基づくが、貸付の方法については北対協で決めているのではないのか。

**【竹内事務所長】**

借入資格の承継条件は国の管轄であり、北対協のみの判断で変更することができないものであると認識している。

**【石川評議員】**

啓発事業について、おそらく 47 都道府県ある中でも、関心を持っているところとそうでないところと、温度差があるのではないかと思われるが、実際のと

ころはどうか。

**【坂上上席専門官】**

熱心に取り組んでくださるところ、なかなか難しいところなど温度差は感じている。各県にそれぞれ事情があることも承知しているが、可能な限り全体的な底上げを実施したい。毎年4月に理事長が任命する、推進委員の方々と連携してベースアップが図れたらと考えている。

**【石川評議員】**

やはり意欲的に取り組んでいる地域が、キャッチコピーやスピーチコンテストに手を挙げてくださる、という事か。

**【坂上上席専門官】**

県民会議だけでなく、教育委員会や学校の先生方の関心の高さが影響している。関心の高い先生方の多い県からは、たくさんの応募がある。学校教育現場が色々と忙しい中で、どれだけ領土教育に時間を割いてくれるのか、大いに関係してくるのではないかと感じている。

**【石川評議員】**

情報発信の方法として、T V e r や r a d i k o を活用するということだが、本学の学生も、テレビは見ないがT V e r など時間を作って見ているようなので、そこに情報を載せていくのは良い事だと思う。

また、今後の予想として、スピーチコンテストやキャッチコピーへの応募作品を、C h a t G P T 等を使用して作成することが想定される。どういうものが良いスピーチ原稿とされるのか、どういったワードが好まれるか、過去にどういったものが賞を取っているのか、A I を活用して分析等を行うことができるようになる。今、自身も学生に対して、レポート作成時にC h a t G P T を使用しないよう指導しているところ。機械などを使わずに、若い人たちの想像力のようなものを活用できる方策が必要になってくる。北対協としても、将来その可能性に備え、対策を検討しておいていただければと思う。

**【濱松評議員】**

「えとぴりか」の運用について、今年度はいくつかの港で一般公開等していたが、令和6年度はどういったものを考えているのか。

また、SNSについては、一方向性のものなのか。頻繁に北方領土クイズというものを掲出しているが、コメントを書き込んでもリアクションが何もなく出しっぱなしになっているように感じる。

さらに、北対協ホームページで公開している情報については、すぐに調べられるように掲載されているのか。中学生を対象とした出前講座などに出向くと、学生は千島連盟や北対協のホームページなどを見て事前学習はしてくるものの、知識のある子とない子のバランスが取れていないように感じる。例えば、現在、ビザなし交流は停止中で、代替事業として洋上慰霊を実施しているが、そういった動きや詳細はホームページですぐに調べられるように掲載されているのか。中学生向け、高校生向け、など内容の区分けが不十分であるように思う。

#### 【坂上上席専門官】

まず、「えとぴりか」の次年度の利活用については、まだ検討の段階であり、お答えすることができない状況。原則として、四島交流の再開を願っているところであり、もしそれが次年度も不可能な場合に、次善の策として利活用を進めるということになる。

SNSについては、こちらからの情報発信を主としている。読者の方へのリアクションは、人員や経費の面では対応が難しい。

学生に向けた資料提供については、副読本やホームページへの掲載を適切に実施している。学校教育現場では現在、ICT教育に注力していることを受け、ICT教材についても用意がある。そういった状況について、周知はしているものの、徹底度については不十分な面もあると認識している。北対協で実施の全国会議の場を使って、あるいは教育委員会の方に向けても周知徹底していきたい。

#### 【飯野評議員】

以前、群馬県議連のメンバーから質問を受けたことについて伺いたい。自身の地元である前橋市の議員で、県内の北方領土議員連盟に所属している方がいる。その方は一度、四島に行った経験もあり、領土問題に関心と熱意を持っている。今年の2月7日の全国会議にも参加し、非常に感銘を受けたとのこと。

群馬県の取組について知りたいとのことで、質問を受けた次第。特に、県民会議の取組について、行政だけで行うのではなく、もっと門戸を開いて、一般の方あるいは議員の方にも中に入ってもらったらどうか、と意見を頂いた。そこで、他県の状況について、どのように運営されているのか参考といたたく教えていただきたい。

#### 【鶴田専務理事】

総論的には、47都道府県で様々なケースがある。県議の方が熱心に関わっている地域もあり、実際に県民会議の半数以上は県議会議長が会長を務めている。47都道府県の推進委員の方の中にも、議員の立場をお持ちの方も多数いらっしゃる。北対協がパイプ役となり、他県の県民会議と繋ぐことも可能なので、その際はぜひご連絡いただきたい。

#### 【石垣評議員】

北対協の皆様には、日頃から全国の返還運動の先頭に立ち、また援護も含めて元島民の方に関わっていただいていること感謝申し上げます。冒頭、山本理事長から安藤石典についてお話があったが、ちょうど私の10代前の市長が安藤石典である。安藤石典が昭和20年12月1日付けで陳情書を書き、実際にGHQに行ったのが翌年の8月。その際、外務省を訪ね、GHQへのつなぎを外務省にて相談したところ、地図に北方領土がなかった。その時に石典は帰り際、これは国内啓発が大変だ、というところから78年が経過している。

本日も様々お話があった中で、多くの青少年や教育者、教育関係者を原点の地である根室に送り出していただいていることは、我々にとっても非常に勇気の湧くことである。実際に来られた方にとっても、やはり原点の地に立って、その風、その空気に触れることが、一番の学びになるとのことで、熱い視線をいただいているところ。

今、残念ながら、四島交流等事業、墓参ができない状況にあるが、これはあまり報道されない。問題が希薄化していくのを、根室市としても危惧しており、今年度54年ぶりにキャラバン隊を出した。

船舶「えとぴりか」の利活用の面でも、多くの青少年、教員、教育関係者も含めた現地視察に、「えとぴりか」をリンクさせるようなことができれば良いかと思う。まずは四島交流の再開が大事なので、そちらも一生懸命やりながら、

船舶の利活用についてもお願いしたい。

以上